



## イノベーションと 学会の役割

Think about Innovation

東海支部長 武田一哉

自動車や航空機を中心としたものづくり産業が盛んな東海地区では、新しい自動車技術に関する絶え間ない研究開発が行われています。特にここ1, 2年は、「自動走行システム」とその社会実装に関して、様々な議論が行われています。このことに関して、私なりに思うことを述べさせて頂こうと思います。

言うまでもなく、多くの電子情報通信技術が自動走行システムに活用されています。周辺物までの距離を計測する技術、周辺の交通状況を車両間で共有する技術、映像やレーダ等の信号を統合して周辺環境を認識する技術、これらの計算処理をリアルタイムにかつ安全に実行する技術、などです。自動走行システムの主役は情報通信技術である、と言っても過言ではないでしょう。自動走行システムの開発とは、このような多様な技術を組み合わせて「運転する必要のない自動車」を作り出すチャレンジです。一方、現在の乗用車には、様々な「高度運転支援機能」が搭載されています。車間距離を保ちつつ先行車両に追従する機能、レーン内の走行を保持する機能、衝突の可能性を検出して停止する機能などです。これらの機能が搭載された車であれば、少なくとも高速道路上であれば、多くの場合、アクセルやブレーキ操作を行うことなく数十kmの距離を走行することが可能です。つまり、「自動走行システム」に必要な技術の多くは、既に「高度運転支援機能」として実装されています。では、「高度運転支援機能」と「自動走行システム」との違いは何で、なぜこれほど大きな関心が自動走行システムに集まるのでしょうか？

恐らく、「運転する必要のない自動車」というのは、誰にとっても分かりやすい未来像であり、それが実現されることでどのように生活が変化するかを想像することは、多くの人にとって夢があることだからでしょう。この、多くの人々が共感し得る未来感こそが、「自動走行システム」の社会的な価値だと考えます。例えばGoogle社は、driverless carのプロジェクトで、ハンドルのない車を作ったり、実験車両で街中を走行する実験を繰り返したりすることで、「運転する必要のない自動車」の価値を社会と共有することに、大きな努力を傾注しています。その様子は世界中に発進され、我が国でも、大胆な挑戦として驚きをもって受け止められています。

イノベーションを通じた産業競争力再生が、我が国の重要課題と認識されています。イノベーションには「運転する必要のない自動車」のような分かりやすい未来像の共有と、その実現にかけるエンジニアの情熱が不可欠です。しかし、企業の研究者の方々と接していると、時に、米国IT企業と自社事業のダイナミズムの余りの違いに、ある種の無力感が漂っているように感じられることがとても気になります。イノベーションを先導するエンジニアには、自分の価値観を「形」にして社会に共感を問う情熱を、是非持ってほしいと思います。

私が所属する大学では、昨年、本会会員でもある天野教授がノーベル賞を受賞するという慶事がありました。赤崎教授・天野教授・中村教授の求道的とも言える取組みは、科学者として真に尊敬に値する態度だと思っています。一方で、とてつもなく楽天的な天野君の性格を知る同級生として、未来を素直に明るく信じる精神もまた、イノベーションに欠かせない要素だと知りました。

技術者・研究者・学生にとどまらず、様々な人々が、自由に明るく元気に未来を語り合う場を提供することで、イノベーションの担い手としての学術コミュニティの責任を果たす、そんな電子情報通信学会であってほしいと思います。